

スポーツ

伊達公子を送る

盛田 常夫

厳しいツアーの転戦

日本のテニスファンを楽しませてくれた伊達公子が引退する。まだ2、3年はトッププレーヤーとして活躍できるだけに惜しまれる引退であるが、ゴルフのように30、40を過ぎても第一線に留まれる世界ではないだけに、新しい人生設計を描くことに誰も反対できないだろう。

ボルグにしてもマッケンローにしても、早々とテニスの一戦を退いたし、エドバーグも今年限りでツアーから降りる。夫人同伴でツアーに参加できる男子にとっても厳しいツアー転戦は、女子にとってもっときついはずだ。40近くまでプレーを続けたナブラチロア

はまれなケースで、レスビアンと騒がれたのも無理はない。ゴルフでも岡本綾子が日本に戻り、低迷しているのを見るにつけ、引き際の大切さを痛感する。今から14年ほど前に世界にデビューし、世界ランク10位以内に入ったことのあるハンガリーのテメシュヴァリは、結局、腰の治療を担当した医師を夫に選び、コーチ役だった父親と縁を切ったが、それ以来、ランキングは下がる一方で、30をすぎた今もお、100位前後の位置から小さな大会を転戦している。

テニスのランキングは過去1年間に稼いだATPポイント（プロテニス協会公認のトーナメントの参加ポイント、女子はWTA）によって決まる。過去に稼いだポイントは日々失われ、次々に新しいポイントを稼がなければ、ランキングは落ちて行く仕組みだ。稼げるポイントは大会の規模（賞金総額）によって差別化されており、それだけのトーナメントのなかでも本戦参加

1回戦突破、2回戦突破と勝ちあがるにしたがって大きなポイントが稼げ、ランキング100位以内の選手を倒したポーナスポイント、10位以内の選手を倒したポーナスポイントなど細かく規定されている。上位選手は主要な大会への参加が義務付けられているが、後は自分の裁量で参加するトーナメントを決める。

男子の場合はポイントの総計を計算するが、女子の場合は平均ポイント（獲得ポイントに参加トーナメント数で割ったもの）で計算する。これは女子の体力を考慮した配慮である。伊達はこの規定を最大限に利用して参加トーナメント数を限定し、ポイントの大きいトーナメント中心にツアーの日程を組んでいた。だから、ユーロススポーツでの伊達の姿を見るのは、大きな大会に限られていたわけだ。しかし、この規定は来年より廃止され男子と同じ規定になる。ツアーの参加数を増やさない限り、ランキングを維持できない。

トーナメント本戦に参加出来る選手の数は限られている。どの大会も、主催者のワイルドカードと予選勝ち上がり者のワイルドカードと予選勝ち上りの枠があるから、ポイントを持たない選手は、自費で小さな大会の予選から参加し、細かくポイントを稼がないと中規模の大会の予選にすら出場できない。もちろん、予選の勝敗はポイントに関係ない。9月の日本選手権を制した鈴木貴男選手などは、ブダペストの大会にも参加し、細かくポイントを稼いでいる。雉子牟田選手などもブダペストの賞金総額数百万円規模の大会に参加している。

変則テニスの強み

伊達が世界に踊り出たのは、1991年8月のヴァージニア・スリム（ロサンジェルス）大会。伊達は予選勝ち上がりで本戦に入り、次々とランキング上位者を倒し、決勝まで進んだ。このトーナメントはユーロスポーツで放映されており、偶然にチャンネルを

ひねった時は目を疑ったものだ。「セレシュと決勝を戦っている東洋の選手」は伊達だった。以前、日本の民放で伊達と沢松のライバル物語が放映されたことがあり、伊達の名前は知っていたが、まさかその彼女がランキング1位のセレシュを相手に互角に打ちあっているとは。女子の力は男子に比べても、世界のレベルに届かないという印象をもっていただけに、大きな驚きと興奮でプレーを見たのを感じている。

どのテニス選手にも特徴はあるが、伊達のプレーを見たことのある人は、どこか変則性のあるテニスだと気付かれたに違いない。新聞では「ライジングボールを叩く天才」という評価が下されているが、実はそれよりもっと重要な特徴がある。それは彼女が左利きにもかかわらず、右利きでプレーしているところにある。

彼女の両手打ちのバックハンドは彼女にはフォアハンドになる。だから、伊達のバックストロークは他の選手よ

りも強くかつコントロールが良い。とくにバックのクロスは天下一品。逆にフォアハンドは彼女にとって、バックハンドにあたる。このフォアハンドは非常に変則的で、ボールを打つ瞬間には常に肘が伸びており、ラケットと一直線になるのが伊達の特徴である。こうした打法は普通は欠点になる。男子で同じ方法をとるグスタフソンが、上位へ上がれないのはこの打法による。

フォアハンドのストロークで、肘を伸ばして打つ癖をつけると、体に近いボールに対して調整が効かない。グスタフソンの欠点はこれに尽きる。もっとも利点がないわけではなく、腕とラケットが一直線になることで、ヘッドの回転スピードがきわめて速くなり、ボールのスピードが増す。形は悪いがボールは速いわけである。ただし、コントロールに難が出てくる。実際、グスタフソンのフォアハンドは素人が振っているような感覚を覚えるのはこのためであるが、コントロールの難が上

位への進出を阻む最大の問題である。

伊達とグスタフソンの違いは、伊達の手が短い点である。したがって、体に近いボールに対しても、それほど苦にならずに反応でき、かつボールのスピードが増す。つまり、打法の欠点を消して、利点を使えることが、伊達の強みなのである。非力な伊達のフォアのクロスの速さが天下一品である理由はここにある。

見習いたい勝負強さ

今は女子でも、男まさりの体をもっている選手が多くなった。ダーベンポートなどは、西武の清原と同じ体格がある。きゃしゃな伊達がダーベンポートと互角に闘えるのも、彼女の変則性が体格以上の力を出しているからに他ならない。シュルツ・マーカーシーなどは190センチ以上の身長から、160キロ以上のサーブを打つし、グラフなどの体力は男子顔負けである。

伊達にもう少しの体力があり、サー

ビスに威力があれば、トップ3の位置を常に維持できただろう。もう少し、グラフと互角の勝負を続けることができただろう。あの身体で良く闘ったと思う。

伊達の引退を喜ぶ選手がいる。その筆頭は、コンチタ・マルチネス。コンチタは伊達に1勝5敗。1994年のオーストラリア・オープンの前哨戦で負け、本戦でも負け、10日間に2度も負けたというので話題になった。いわば伊達は天敵。それからサバチーニ。ヴァージニア・スリムで最初に負け、1994年のWTAの最終戦（ニューヨークで行われるベスト16の選手によるトーナメント）で、マッチポイントを何度も握りながら、セットを落とし逆転されて以降、伊達には勝てなくなった。

反対に、伊達が苦手にしてきた選手は、グラフを除くと、サンチェスと南アのコエッア。同じストロークを身上とするタイプは苦手にしてきた。し

かし、今年に入り、伊達はネットプレーを習得し、全米オープン直前の東芝クラシックスではストロークとネットプレーを織り混ぜ、久し振りにサンチェスに圧勝している。また、コエッアには、9月のニチレイトーナメントで完勝し、セレシユとも競い合ったことは記憶に新しい。

その直後の引退表明だけに惜しいが後は杉山初め、若い選手の活躍を楽しみにするということだろう。彼女の栄光と勝負強さは今後も語り継がれていくだろうが、尾崎将司などには、伊達の爪のあかでも煎じて飲んでもらいたい、と思うのは私だけではなからう。

